

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ひどい子の話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001816">https://doi.org/10.15021/00001816</a>



ひ  
ど  
い  
子  
の  
話

## 199 子どもと野原の怪物

お話、お話。

二人の子どももがいた。子どもの母親は息子と娘をうんだ。父親は死にかけたとき、娘に、「おねがいだ。約束をしておくれ。アウタがしたいことをさせてやりなさい。とめてはならない」といった。母親は、「よろしい」といった。母親は死にかけたとき、娘に、「おねがいだ。約束をしておくれ。アウタがしたいことをさせてやりなさい。とめてはならない」といった。母親も死んでしまい、二人の子どもをあとにした。アウタは家畜をとり、つぶしていく。

さて、姉さんはアウタに、「アウタよ、家畜をつぶさないように」という。

さて、アウタは、「父さんと母さんは、なんといったの」という。

さて、アウタは家畜をとり、つぶす。そのうちに、二人の家畜はすっかりなくなってしまった。

さて、姉さんはアウタを肩にのせた。二人はどんどんあるいていく。

さて、二人があるいていくと、子どもたちがあそんでいる。子どもの母親たちは畑にいつていた。

さて、アウタは子どもたちにウス遊びをしようといった。

さて、アウタは子どもを一人ウスにいれて、ついた。アウタはその肉をとり、日のあたるところにほしておいた。

さて、姉さんは、「なにをするの。アウタよ」といった。

さて、アウタは姉さんに、「父さんと母さんは、なんといったの」といった。

さて、姉さんはアウタをせおって、にげた。

さて、子どもたちの母親たちがかえつてくると、子どもがごろされていた。母親たちはどんどんはしつて、アウタと姉さんにおいついた。二人はそこにいた。(二人はにげきる。)

さて、二人は王さまの屋敷に身をよせた。

さて、王さまは二人をむかえて、二人を泊めた。

さて、二人は王さまの子どもとあそんでいる。

さて、アウタは棒で、王さまの子どもをついた。

さて、姉さんはアウタに、「どうしてそんなことをするの。アウタよ」といった。

さて、アウタは、「父さんと母さんは、なんといったの」といった。

さて、姉さんはアウタをせおって、どんどんどんどんにげていく。

さて、王さまがやってくると、アウタがやったことをみつけた。

さて、王さまたちはウマにのつて、どんどんはしつて、二人のあ

とおつかけてくる。

さて、姉さんはおおきな木をみつけた。

さて、姉さんは（弟をせおったまま）木にのぼった。二人は木のうえにいる。

さて、王さまがやってきて、木のしたでやすんでいる。

さて、アウタは木のうえにあるものをとると、それを王さまたちになげる。

さて、王さまたちはアウタたちに気づかなかった。

さて、王さまたちは身をひるがえし、もどっていった。

さて、姉さんはアウタをつれて、木からおりた。二人はどんどんはしつていく。とうとう二人はある村についた。この村には太陽がなかった。

さて、二人はある老女の小屋につき、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。老女は二人に、「はやく小屋にはいりなさい。この村には怪物がいて、太陽をのみこんでしまった。太陽がみえなくなつてしまった」といった。

さて、アウタが、「なんだつて。ぼくはこわくない。ぼくはにげない」といった。

さて、アウタは小屋からでて、野原にいった。野原にいき、どんだん薪をあつめた。薪はたくさんあつまった。夜になった。村人たちは戸をとぎした。姉さんは心配した。アウタはやって来ると、火

をたき、石をひろつて、火のなかにつんだ。

さて、夜がふけた。

さて、怪物は野原で鳴き声をあげる。怪物は、「村にいるだれが、わしにまさるか。わしはハイエナだ」といった。

さて、アウタはぱっぱつとあるいていき、「ここにぼくがいる。ぼくはおまえにまさる。ぼくのいるここまでこい」といった。ハイエナはやってくるとき、「村にいるだれが、わしにまさるか」という。アウタは怪物に、「ここにぼくがいる。ぼくはおまえにまさる。ここまでこい。ぼくはいる」という。そのうちに、とうとうアウタがやってきた。ハイエナがちかづいてきた。アウタは火でまっかになつた石をもちあげて、怪物になげる。怪物はその石を口でうけ、のみこんでしまう。アウタは石をもちあげては、なげる。怪物はその石を口でうけ、のみこんでしまう。とうとう、アウタは怪物をまかした。

さて、怪物はたおれて、死んでしまった。

さて、アウタは怪物のところにいき、その尾っぽをきりとつた。アウタは草履の片方をぬぎ、怪物のところにほつておいた。

さて、アウタは家にかえり、小屋にはいつて、よこになった。夜があけて、朝になった。

さて、太陽がでてきた。

さて、村人たちは、「きょうは、どうして太陽がでてきたのか」といった。

さて、村人たちは怪物がたおれているではないかといった。

さて、この土地の王さまが、「だれが怪物をころしたのか」といった。

さて、村人たちは、しらないといった。

さて、村人たちは、「子どもが二人老女のところに身をよせているが、ひよっとしたら、その子どもたちがころしたかもしれない」といった。

さて、村人たちはたちあがって、老女のところにいき老女にたずねた。村人たちは村の子どもをよんだ。子どもがやってきた。みんなやってきて、つきからつきへとそこにあつた草履に自分の足をあわせていったが、草履は足にあわなかった。

さて、村人たちは子どもをよんだ。子どもがやってきた。子どもの足と草履をあわせた。子どもは自分の草履をとり、尾っぽをもつてくると、なげすてた。

さて、この土地の王さまは村の半分を子どもにあたえた。王さまは自分の娘を子どもにやった。子どもはその娘と結婚した。王さまはその子どもの姉さんと結婚したとき。

お話はみじかく、わたしの命ながい。

(一九八三年一月二七日、語り手 ハディージャ・プーバ、ガウ

## 200 ムサルデ

お話、お話。

ムサルデの話。ある子どもがいた。子どもはまったく恥知らずだった。乾期のモロコシの畑を除草するときがきた。父親も、母親も、畑を除草しにいった。子どもは穀物倉にあつたモロコシをみんなもつてきて、たいしてしまった。父親と母親が家にかえつてきて、(それを見て)「息子よ、どうしてそんなことをするのか。わしらは王さまか」といった。父親はでかけていった。

さて、父親ははしつて、王さまをよびにいった。王さまがやってきた。王さまが、「おまえさんはどうしてわしをよんだのか」といった。子どもの父親は、「わたしの子どもがわたしの穀物倉のモロコシをみんなたいてしまい、わたしが『わしらは王さまか』といったからです」といった。

さて、王さまは家にかえつていこうとする。ムサルデは父親に、「王さまがこられたのに、王さまになにもあげないのか」といった。

さて、ムサルデの父親は王さまに、「わたしはあなたにわたしの子どもをさしあげます。子どもはまったくの恥知らずです」といった。

さて、王さまは男の子をつれていっしょにいつてしまった。

さて、王さまは男の子に、雌ヒツジの番をするようにといった。男の子は雌ヒツジをつれて、餌をたべさせるところにいった。男の子は雌ヒツジの目玉をとって、たべてしまった。目玉が三つあったので、紙につつんでもつてかえってきた。王さまは男の子に、「それをわたせ」といった。男の子は、「はい。王さま」といった。(王さまはその目玉をたべてしまう。)男の子はいくと、雌ヒツジをつれてかえってきた。王さまが、「わしの雌ヒツジの目玉はどこにあるのか」といった。男の子は、「それで、あなたはなにをたべたのですか」といった。

さて、王さまは男の子を太鼓たたきにやった。金曜日に、王さまは男の子を太鼓たたきにやってしまった。

さて、太鼓たたきは小間使いになった男の子に肉をやくようにといった。

さて、男の子は太鼓のばちと太鼓をとると、薪にしてしまった。男の子が肉をやくと、太鼓たたきはその肉をたべてしまった。太鼓たたきは、「わしの太鼓はどこにある」といった。男の子は、「なにで、肉をやいてくれというの」という。

さて、太鼓たたきは男の子を王さまのところにつれていった。太鼓たたきは、「はい、王さま。この子どもはわたしの手におえせん」といった。

さて、王さまは男の子を男の子の父親のところにつれていった。

男の子は父親のところにもどると、かしくくしていた。何年かすると、男の子は、「勉強をしにいく」といった。

さて、男の子の父親は男の子をイスラム教の先生のところにつれていった。

さて、先生は、「おまえさんの子どもの名前はなんというのか」とたずねた。男の子の父親は、「子どもの名前はムサルデといいます」といった。

さて、男の子は、「そうではない。父さん、うそをつかないでおくれ。わたしの名前は、『アッラーのみ名によって。はい。まいります』といいます」といった。

さて、男の子は先生のところに行った。先生は自分のよめさんに料理をするようにとあった。先生のよめさんたちは食べ物をもってきた。先生が、「アッラーのみ名によって」といい、(食べ物をたべようとすると)ムサルデは、「はい。まいります」といって、(やってくる)食べ物をみんなたべてしまった。先生はどうしようもないとおもった。先生はよめさんに真夜中に料理をするようにとあった。

さて、しつていとおもいますが、イスラム教の先生たちは食事をするとき、「アッラーのみ名によって」という。先生のよめさんは先生のために、真夜中に、料理をつくった。ムサルデはねてしま

った。先生は、「アツラーのみ名によって」といった。ムサルデは、「はい。まいります」といった。ムサルデは食べ物をみんなたべてしまった。

さて、真夜中に、先生はうろつきにいくといった。

さて、男の子は先生についていくといった。

さて、先生は、「ハイエナの皮でつくった袋をとり、それに本をいれなさい。インク壺をとり、肩にかけなさい。きなさい。でかけよう」といった。

さて、男の子は本のうえにウンコをして、本をとじて、袋にいれた。インク壺のなかに小便をし、袋にいれて、肩にかけた。男の子と先生はでかけていった。二人はでかけていき、あるいていき、すわった。

さて、二人はある王さまのところにとまった。

さて、王さまのよめさんは二人に食べ物をつくり、もってくる。

さて、ムサルデはいいかげんで、先生は年をとっていて、目がよくみえないので、先生に、「そこにハイエナがいる」といった。先生は弓をとり、矢をつがえ、王さまのよめさんにむかって、矢をいれて、ころしてしまった。

さて、ムサルデは、「ああなんとということか、先生は王さまのよめさんをころしてしまった」といった。(ムサルデと先生はにげていく。)

さて、王さまは二人をおつていく。ムサルデと先生はにげていき、おおきな木にのぼった。そこに、王さまたちがやってきて、やすんだ。

さて、ムサルデは、「先生、先生、ぼくは、王さまの頭のうえに小便をする」といった。先生は、「おねがいだ。ここにわたしの口がある。このなかに小便をしておくれ」といった。ムサルデはそれをこばみ、王さまの頭のうえに小便をした。

さて、王さまは、「おい、鳥よ、わしはたちあがつたら、おまえたちをひどい目にあわす」という。ムサルデは、「先生、先生、ぼくは、王さまの頭のうえにやわらかいウンコをする」といった。王さまは、「やわらかいウンコをするな」といった。ムサルデは、「ぼくはやわらかいウンコをする」といった。ムサルデは王さまの頭のうえにやわらかいウンコをした。

さて、王さまがうえをみると、二人がいた。

さて、ハゲワシがとんでいる。ムサルデはハゲワシの羽をつかんだ。

さて、先生はムサルデの足をつかんだ。二人はとんでいった。

さて、ムサルデは、「先生、ぼくから手をはなしておくれ。ぼくから手をはなしておくれ」といった。先生は、「子どもよ、わたしが死んだらどうしてくれる」という。ムサルデが足をこのようにすると、先生は地面にドスンとおちていって、死んでしまった。先生

の肉がとびちった。

さて、ハゲワシは木のうえにおりていった。ムサルデはいくと、地面におりた。ムサルデが先生がおちた方をみると、先生の肉がとびちっていた。先生の歯がとびだしていた。ムサルデは、「こん畜生め、なにをわらっているのか」といった。ムサルデは剣をもち、先生の歯をたたいた。

さて、ムサルデがいくと、狩人がカモシカを射ている。ムサルデはカモシカをおいはらった。

さて、狩人はムサルデを矢で射たとき。

お話は、おしまい。蒸し焼きができた。

(一九六九―七〇年、語り手 ガルア出身の両親をもつアブドゥ  
ッラーヒ・マイダーデイ・サードウ、マルアにて)



